

葛飾物語

半村良



G・R・O

中公文庫



中公文庫

かつしかものがたり

葛飾物語

定価はカバーに表示してあります。

1998年1月6日印刷

1998年1月18日発行

著者 ^{はんむら}半村 ^{りよう}良

発行者 笠松 巖

発行所 中央公論社 〒104-8320 東京都中央区京橋 2-8-7

TEL 03-3563-1431(販売部) 03-3563-3664(編集部) 振替 00120-4-34

©1998 CHUOKORON-SHA, INC. / Ryo Hanmura

本文印刷 大日本印刷 カバー印刷 三晃印刷 用紙 王子製紙 製本 大日本印刷

ISBN4-12-203045-5 C1193

Printed in Japan

乱丁本・落丁本は小社販売部宛お送り下さい。送料小社負担にてお取り替えいたします。

中公文庫

葛飾物語

半村良



中央公論社

目次

序

昭和十八年の場

9

昭和二十年の場

48

昭和二十二年の場

90

昭和二十四年の場

133

昭和二十六年の場

175

昭和三十年の場

219

昭和四十年の場

259

昭和五十年の場

297

昭和六十年の場

336

昭和六十三年の場

372

平成の場

398

解説

縄田一男

403

葛飾物語

幾代も続く人の世の、ほんの短い物語

序

昭和四十五年十一月一日、東京都葛飾区役所発行。葛飾区史・上巻より抜粋。

7 序

……元来江戸・東京の町並は城（皇居）を中心として発展していったが、その皇城地から一〇キロの地点に位置する本区の地域は長い間、典型的な都市郊外の農村として経過した。区の北部を通る水戸佐倉の幹線道路が江戸と近隣地域を結び、それらの道路沿いには街村風の町並がわずかに形成されていた。しかしつい五十年ほど前までは、これらの地区を除き、見わたすかぎりの田圃とこれに付随する湿地や池沼が散在し、葛西三万石の米産地といわれたころの田園風景がそのままみられたものである。それが明治後期における常磐線の敷設や大正初期の京成電車の開通で次第に都市的発展のきざしがみえ、さらにこれ

に拍車がかけられたのが大正十二年の関東大震災である。(中略) 災後都心部、特に本所・深川方面から大量の移住者が流れこみ、区の南部地区(立石・四つ木方面)では、はやくも住宅地化の現象がみられた。(中略) 特に戦災後の復興と諸般の進展ぶりは、きわめていちじるしく本区の様相をさらに一変するにいたった。中でも人口の増加はいちじるしく昭和七年の葛飾区誕生当時からみると現在五倍以上の増加を示している。その要因はもちろん都心部よりの移住者と大都市集中化に伴う全国各地からの流入人口の定着であるが、……(後略)

抜粹させていただき、まことにありがとうございました。

葛飾区役所様

作者

昭和十八年の場

一

幼い孫を背負った老人が、土手の中ほどに腰をおろして、川の流れを眺めている。

川面から土手の上まではせいぜい四メートルほどの、草の生えた斜面。対岸には葦の生い茂っているのが見えるが、老人のいる側には、あまり葦は生えていない。

すぐそばに、川へ突き出した栈橋のようなものが見えているが、それは友禅工場の洗い場で、染物をそこで洗えば、老人のずっと右側まで色彩の帯が揺れることになるのだが、近ごろは友禅流しもあまり行われず、老人の背後に見える染物の干し場も、空家の二階の物干しのように寂しげだ。

「ほら坊や。あそこに見えるのが本奥戸橋だよ。鉄の橋だぞ。昭和七年にできた橋だよ。それまでは、上流の奥戸橋という木の橋を渡っていたもんだ。立石^{たていし}さまのそばに架かっている木の橋さ。立石さまはメンヒルだ。このまえ話してやったよな。古い古い石の一本柱だ。いまはもう地面へめりこんじまっているがな。それでもまだ頭は出てる。大昔、だれかが安房^{あわ}のほうからかついで来たんだ。エツチラ、オツチラとな」

老人はそういいながら背中を揺らす。ねんねこ半纏^{はんてん}にくるまれた背中の坊やは、気持よさそうにしている。

「このうねうねとまがりくねった中川だつて、昔はなかったんだぞ。できたのは江戸時代だそうだ。あのでかい荒川だつて、できたのは昭和五年だ。遠い安房から立石さまをかついできた大昔の人も、中川を掘った江戸時代の人も、荒川を作ったいまの人も、みんなここらでしあわせに暮らしたいと思つてやつたんだ」

老人は腰をあげ、ゆっくりと土手をあがりはじめ。

「それを戦争なんかはじめやがつて。いってえどういうつもりなんだか」

土手の上の道を、老人は本奥戸橋のほうへ去って行く。いつものように、橋のたもとで左へまがり、坂の途中の喜多向^{きたむき}観音にお参りしてから家へ戻るのだろう。

二

赤ん坊を背負った老人は、奥戸橋を背に坂道を下って行く。道のむこう側に風呂屋があって、ちようどその入口とむき合う位置に、喜多向観音を祀^{まつ}った小さな社^{やしろ}があり、そこで足をとめると軽く両手を合わせ、背中の子供をひと揺すりして、また歩きはじめる。

その道は奥戸から四ツ木へ抜ける立石大通りで、両側に歩道のついた舗装道路だが、老人がだいぶ先の下駄屋のところで左へまがりこむまで、とうとう自動車は一台も通らなかった。

もう七十はとうにすぎたその老人は、少し湿った土の道を、とぼとぼとした感じで進んで行く。

「あら、細田のお爺ちゃん。また防空頭巾なしで歩いてる。叱られても知らないから」
近所の主婦だろうか。もんぺ姿の女がうしろから追いついて行って、そう注意する。

「子供をおぶってて、あんな三角頭巾をかぶったら、背中の子供が苦しがるから」

老人は弁解気味にいい、その女と一緒に右の路地へ入りこんだ。狭い路地で角は竹垣の家。もう一本先の道へ突き抜けている。

「さようなら」

老人は細田という表札をかかげた家のガラス戸をあけて、中へ入る前に女に挨拶した。

「ごくろうさま」

女も挨拶を返し、そのむかひの家の前に立つ。

「こんちわあ、お邪魔しまあす」

ガラガラ、ピシヤン。女はその家の玄関の格子戸を連続して開け閉めし、勝手知った様子で上へあがる。

「買ってきたわよ。こんにやくと牛蒡ごぼうと白菜」

「ありがとう。台所へおいといて」

その家の主婦は茶の間におり、訪ねて来た女は三畳の部屋を突き抜けて、台所へ消える。玄関、三畳、台所が縦の線で、三畳の横に六畳の部屋がある。その隣は八畳間だ。

茶の間に使われている六畳間と奥の八畳間は横の線で、そのふた間は南側の庭に面して廊下がついている。廊下の八畳側の端に、庭にむかつて便所が出っ張っている。

したがって廊下の外れのところに、手水鉢ちようずばちが置いてあり、便所を使った者は、縁側の端のガラス戸をあけて、庭の角にある手水鉢で手を洗うことになる。

庭は家の横の線と同じ長さで、幅は二間ほどと狭い。竹垣がめぐらしてあって、その竹垣は建仁寺垣けんにんじがき。さっき子供を背負った老人が入って来た曲り角から、路地の中へつらなっ

ている。

この家の玄関のところでその竹垣が切れ、やつで八手や大名竹だみょうちくの植込みになっている。庭の真ん中には物干しが居すわっていて、シーツなどを干すと竹垣も見えなくなってしまふ。むかいは平屋の羽目板と屋根が見えるだけ。

その庭へおりて竹垣を背に庭から家の中を眺めると、まず六畳と八畳の長さの縁側があって、玄関側の端に雨戸の戸袋。八畳側の端に便所が出っ張り、その出っ張りの角に手水鉢がある。

縁側にはガラス戸、座敷側には障子がはまり、六畳のむかって左角には茶だんす。その横が押入。押入は上が襖ふすまで下が板戸。

その板戸の前に長火鉢が置いてある。

八畳間はむかって左が押入、そして床の間。床の間から壁が手前にまがっており、その右の壁に仏壇と和だんすがはめ込みになっている。ほかには鏡台があるだけで、全体にこざっぱりした感じの家だ。

洋服だんすと子供の勉強机は三畳のほうに置いてある。

「あら、その着物、やっぱり仕立てなおしちやうの……」

台所から茶の間へ出てきた女は、この家の主婦がしている縫物を覗きこんで、惜しそ

にいう。

「だってこれ、もう着られないんだもの」

臙脂えんじの矢絰やがすりだ。娘時代に着たのをひっぱりだして、もんぺと上着に仕立てなおしているのだ。

「上下おそろいの戦時服なんて、だいぶおしやれだわ」

「防空演習のとき着ようと思って」

主婦は春野久子。未亡人だ。年は三十ちようど。訪ねてきた女は山下良江、二十八歳。遠縁ながら縁続きで、ともにこの本田原町ほんでんはらまちで結婚した。

久子はふつくらした色白の美形で、二人の子持。二人とも男の子。良江のほうは痩せぎすでやや癩性かんしよう。することが万事手早いくせに控えめな性分で、決して人の批判をせず、いつも他人のすることを感じて見ているようなところがある。子供は長女の下に三人の男の子。

「さあ、そろそろばあちゃんが来るころだわ」

久子は縫物をしまいはじめた。

三

春野久子の家の隣は、この路地一帯の地主の屋敷で、その隣に三軒長屋がある。長屋といっても二階建で、間取りはみな同じ。一軒ごとに板塀と門がついた、わりと結構な造作の長屋である。板塀と門がついているくらいだから、当然路地に面して小さな庭があつて、門には両開きの格子戸が入つていて、その格子戸をあけて敷居をまたぐと、すぐ玄関のガラス戸の前に立つことになる。庭というのはその玄関の左側にあり、庭と呼ぶのもおこがましい感じの猫の額だが、その庭にも沓脱ぎくつぬぎの大谷石おおやいしが置いてあつて、短い縁側がついている。

その縁側でカーキの国民服を着た男が、爪を切っている。三軒長屋のいちばん右端。田村という大家の屋敷をはさんで、春野家とはごく近い。

それもそのはず。爪を切っている小島重吉は春野久子の叔父にあたる。年は四十歳。連れ合ひは小島伊勢。久子たち親類の者からばあちゃんと呼ばれて頼りにされているしっかり者だ。

「工場でみんな騒いでやがつた」

爪を切りおえた重吉がいう。